

---

# プール当番

かみや さとる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
プール当番

【Nコード】  
N4706F

【作者名】  
かみや さとる

【あらすじ】  
中学最後の夏。恋とか友情とかいろんなものがある。例えばプールとか。

## 突然なお願い

「おーい、矢野ー」

Y中学校、3階にある3年2組の教室を出ようとした僕に、同じ2組の藤沢が呼び止める。

「お前さ、今日ヒマ？」

「受験生にヒマなんてないよ」  
嫌な予感。

「プール当番変わってくんない？」  
的中。

僕たちの中学校は、第2、第4土曜日に、午前中だけ授業がある。そして、6月の終わり頃、プール開きの前に、クラスから1人ずつ、プール掃除の当番を決めて掃除する事になっている。そして、本日土曜日、ジャンケンで負け、不運にもプール当番になった藤沢が、1年間使われていない、若干藻のついたプールを掃除する。はずだった。

「今日どーしてもはずせない用事があんだよ」

藤沢とは小学校からの付き合いで、いつもはこういう頼みはしてこない。だが、プール当番なんて絶対になりたくない。

「どーせプール掃除に行く奴なんて真面目な女子くらいだろ。サボればいいじゃん」実際、全学年のクラスから1人ずつだったら、10人以上になるはずなのだが、来るのはせいぜい7、8人くらいだ。いや、もっと少ないだろう。

「お前は藻の浮いた緑色のプールに入りたいのか。俺は入りたくないぞ。それに、プール当番サボった奴って内申にひびくって先輩に聞いたことあるんだよ。頼む、プール当番変わって下さい」

そして藤沢は、僕の前で土下座をした。野球部の4番でエースだった藤沢に、土下座させるところを他の人に見られたら、大変なことになる。

「お前どんだけプール掃除したくないんだよ。もう分かった。当番変わってやるから立てって」

と、僕が言っていると、

「そうか。お前ならそう言ってくれると思ったよ」

と、満面の笑顔で言い残し、鼻歌を歌いながら、階段を下りていった。一人立ち尽くす僕。プール掃除かあ。

## くじ引き

「せーのでいくよ。せーの」

ユイのかけ声で、私達は、割り箸でつくったクジを引いた。

「だれー？当たり前クジ引いた人」

「・・・わたし」

「えー。涼子ー？」

クジを引いたのは、やっぱり私だった。

「涼子3年連続じゃん。さすがにきついっしょ」

「いや、ここまできたら記録更新しちゃうよ」

みんなには、何でもない様に振る舞うが、まさか3年連続でプール当番をする事になるとは思わなかった。1年のときは、名字が青木で、出席番号が1番というだけで学級委員長にされ、その頃は、なぜかみんなが嫌がる仕事は、学級委員長がするべきだと思っていた。そして、軽い気持ちでプール当番を引き受けてしまった。2年の時は、皆でジャンケンで決める事になり、阿部君という子に決まった。はずだったのだが、そいつは、学校が終わると、そそくさと帰ってしまったのだ。

確かにプール掃除にくる人は、毎年10人も来ないらしい。私が1年のときは、7人だった。先生達も、自分たちが入るプールなんだから、自分たちで何とかしろ、といったかんじで、関与してこないでも、そういう真面目に当番の役目を果たした人が、バカをみるのは嫌だったので、一言いってやろうと思い、そいつを追った。

体育館前廊下にて 私

「ちょっと阿部君、プール当番サボるつもり？」

阿部

「どーせ行くやつなんていねーだろ。それに俺、プール入んねーし」

私

「そっという問題じゃない。決まった事なんだからちゃんとやりな

さいよ」

男

「あー」

私・阿部

「なんだよ」

男

「環境委員の者ですけど、2年4組のプール当番の人はプールに集合してください」

私

「ほら阿部君、集合だつてよ」

阿部

「あー、それなんですけど、この桜木涼子さんがボクの代わりにやりますんで」

私

「おーい」

阿部

「では」

私

「ちよつとー、君追つて」男追いかけるが、阿部君瞬く間に視界から消えていく。

男

「・・・行っちゃいましたね」

私

「・・・」

男

「プール当番、どうしましょっか」

私

「・・・はあー」

こうして私は、2年のときもプール当番になったのだった。そして3年生。私は3回目のプール当番に決まってしまった。

「涼子ドンマイ。代わってあげてもいいけど」

「決まった事はやり遂げる。それが私の人生のスローガンだから」  
「そうっすか」

ユイは、中学1年の時から一緒のクラスの友達だ。スカートも長くて、真面目そうな印象を持たれる私に対して、スカートは普通に座っててもパンツが見えちゃいそうで、平気で1週間くらい欠席する女の子だ。なんでそんな、共通点が一つも見つからないような2人が話すようになったのか分らないが、気がついたら、一番信頼できる友達になっていた。

私とユイは、放課後、時計の長針が1を指している時間、3年5組の教室で、2人で机にお弁当を広げていた。私たちの他には、男子が4人いて、2人は問題集のような物を黙々と解いていて、もう2人は、黒板に丸山先生（体育の教師で、マツチヨなので、まるやまきんにくんと呼ばれている）と思われる絵を描いていた。

「プール掃除って何時くらいに終わんの？」

ユイは、ものすごく大きいおにぎり（爆弾おにぎりって言うんだっけ）を食べながら聞いてきた。「えーと、2時から始まるから4時くらいには終わると思うよ」

「じゃー、終わったらカラオケね」

「オッケー」

私とユイは、お弁当を食べた後、玄関のところで別れた。グラウンドには、野球のユニフォームを着た子がサッカーをしていた。

「じゃ、掃除がんばれよ」

「うん」

「2時まで何すんの？」

「道具の準備でもしてるよ」

「さすがベテランは違いますな」

「うるさいよ」

「じゃーね」

「ばいばい」

ユイはかばんも持たず、手ぶらで帰っていった。ほとんど毎日がそうだ。なのにテストでは常に学年で3番以内にいるのが不思議だ。グラウンドでは、野球部がやる気のないかけ声をだしてランニングをしている。

「あれっ？桜木じゃん」

後ろを振り向くと、2組の藤沢君が立っていた。

「藤沢君まだいたの？」

この学校で藤沢敬太を知らない人はいない。1年生の時からエースで、今年の夏は全国ベスト8まで勝ち進んだ。その野球の実力と、かつこいいのにかっこつけていないというのがかっこいいと、女子に絶大な人気を誇っている。

「進路相談に時間がかかったんだよ。桜木はもう帰んの？」

「それがプール当番に選ばれちゃって」

「うわーそりゃ災難だわ」

「ねー2組のプール当番って誰？」

私がそう聞いたとき、なぜだか藤沢君の目が泳いだように感じた。

「えーと誰だったかな。桜木見てくれば？まだ2組にいると思うから」

「いいよ。そこまで気にならないし」

「もしそいつがサボる気だったらどうする？桜木、正義感の強い君ならきつと行ってくれるはずだ」

「はあ」

藤沢君の妙に強引な説得に私は応じる。

「じゃあな桜木。プール掃除がんばれよ」

そう言い残し、藤沢君は満面の笑顔で去っていった。マウンドで豪速球を投げる時の表情と、あの笑顔とのギャップに女子はやられるのだなあと、他人事ながらに思った。さて、まだプールに行くのは早いし、まだ見ぬ2組のプール当番に会いに行ってみますか。



## おせっかい

サボろっかな。

藤沢と別れた後、コンビニにおにぎりを買いに行つて（午前中で授業が終わるときは、部活をしている人はコンビニで昼食を済ませる人が多い）、教室で昼からも勉強するという猛者達と一緒に昼食をとった。そして1時半を過ぎた頃、自分は何をしているんだと急に思い始めた。藤沢にまんまと騙されたのではないか。大体あいつが内申など気にする訳がない。プール掃除なんてやつとる場合か。僕はカバンを肩に掛けて教室を出た。そして誰かにぶつかった。

「あいたたた」

「ゴメン。大丈夫・・・あれっ？」

「勇介？」

「涼子？」

二つの声が重なった。2人ともぶつかった衝撃でしりもちをついていた。気まずい沈黙が流れる。

「・・・なんで涼子がここにいるんだよ」

「勇介こそ」

涼子は立ち上がりながら言う。

「俺は今からプール掃除だよ」

行かないけどね。

「え？勇介も？」

も？なんか嫌な予感。

「実は私もプール当番に選ばれちゃってさ」

的中。

「あら、それではお互い頑張りましょうね。さようなら」

僕はその場を立ち去ろうと歩きます。が、涼子に腕を捕まれる。

「勇介、サボる気でしょ？」「へ？」

僕は間抜けな声を出した。

「何年の付き合いだと思ってんの。とにかくサボるのだけはダメだからね」

付き合いというのは、男女のカップルを指すものではない。

家が近かったせいで、小・中学校が一緒なだけだ。涼子は髪が短く、今どきの女子と違ってスカートも長い。なのに、小学校の時からモテていた。中学2年生の時には1日に4人から告白されたらしい。

小学校が一緒ということで、桜木涼子を紹介しろと何回言われたか分からない。どこがいいのかと一度聞いたことがある。

「うーん、顔が可愛いっていうのもあるけど、あの男子なんか興味無いみたいな感じがいいな」

らしい。僕にはおせっかいな幼なじみというだけだが。

僕と涼子はプールに向かうため、廊下を歩いていた。隣には図書館がある。

「つーかついてくんなよ」

「しょうがないでしょ。こっちが近いんだから」

相変わらずだなホント。

## 気まずい2人

まさか勇介がプール当番だったとは。勇介とは中学校に入ってからほとんど話していない。なぜだか避けられている気がするのだ。

私と勇介は、プールと体育館をつなぐ渡り廊下を歩いていた。勇介は私の常に5メートルくらい前を歩く。プールは25メートルの8コースある。入り口から見て右側にはグラウンドがあつて、陸上部がトラックで走る姿がすぐ手前で見える。左側には大きな気が3つ、プールサイドに沿うかたちで並んでいる。

プールには、期待はしていなかったが4人しか来ていなかった。3年生は一人もいなかった。みんな2年生か1年生だろう。

「少なさ」

勇介はあまりの少なさに驚いている。

「掃除するブラシとかどこにあるんだ？」

勇介は後ろにいる私を見ずに言った。

「もう少ししたら環境委員の人が持ってくると思うけど」

そっちがそんな態度ならこっちだって。私も無愛想に答えた。勇介はグラウンド側のフェンスにもたれかかって、陸上部と何か話していた。私は入り口付近にあるベンチに座って、環境委員が来るのを待った。10分くらい経っただろうか。ぽかぽか陽気に誘われて、うとうとしていたときに、ステッキブラシを持った環境委員が3人やって来た。3人の内1人は、私と同じクラスの菜々子だった。

「おっ、さすが涼子。3年生はみんな来ないかと思ってたよ」

「決まったからにはやらなきゃね」

菜々子は両手にステッキブラシを持って、やる気満々という感じだった。掃除は、ゴミや汚れという敵との戦いだと菜々子は言っていた。菜々子が清掃活動に積極的に参加するのは、ボランティア精神というよりは一種のスポーツのようなものなのかもしれない。

「矢野君も来てるんだ。感心だなー」

気がつくとも介は私のすぐ後ろに立っていた。

「おう。こういうのって大事だからな」

サボろうとしてたくせに。勇介は菜々子からデッキブラシを受け取り、バットと見立てて素振りをはじめた。他の1、2年生の子達も環境委員からデッキブラシを受け取る。みんなズボンを捲つたり、スカートの裾を曲げ始めた。

「後から誰か来るかもしれないから、あと2、3本持ってこよつかな」

その可能性は0に近いと思つたが、菜々子は言つた。菜々子が立ち去ると、また2人の気まずい空気が流れる。

プールサイドでは1、2年生の4人がプールの中を見て、

「うわっ」とか

「きたねー」とか言っている。

「・・・いまのうちにトイレ行つとこっかな。涼子これ持って」

勇介は私にデッキブラシを預けると、プールから立ち去つた。小学校の時はこんな気まずい感じじゃなかったのに。私はいつからこうなつたのか思いだしてみる。

## ある決意

こんなに気まずい感じになったのは何が原因だろう。僕はさして尿意も感じなかったが、あの空気に耐えられずトイレに来て便器の前に立っていた。

小学生の頃はこんな感じに気まずい空気になることはなかったはずだ。

家が近くて、学校にも一緒に来ていたくらいだ。

小学4年生まで一緒のクラスだったわけ。夏休みに僕と涼子とそれぞれの家族でプールに行った事を覚えている。流れるプールにずっと流されていた。ウォーターライダーがはやかったな。涼子はあのころから真面目の片鱗をみせていた。プールの休憩時間するとき、僕が少し早くプールにはいったくらいでぶったたかれた記憶がある。小学5年生に上がった時、クラスが別々になった。それからだったような気がする。涼子と前みたいに一緒に学校へ行かなくなったのは。まあ5年生にもなって女子と一緒に学校に行くのも変か。でも喋らなくなったのはどうしてだろうか。そういう年頃に突入したからか。でも自分はそういうのを気にするタイプではなかったはずだ。あーもう。面倒くさー。

よし。もう中3にもなるんだし仲直りするか（別にケンカしたつもりもないけれど）。そう考えると、このプール掃除はもってこいの機会に思えた。トイレの洗面所で手を洗う。鏡で笑顔を作ってみる。さっきまでの態度はちよつと変だったな。別に涼子の事キライでもなんでもないのに。笑顔が大事だ。変に意識すんなよ自分。この退屈な行事に意義を見いだせた事に少し満足しつつ、僕はプールへ向かった。

## 見守る者たち

プールの柵の外にある大きな木。その陰に隠れて、藤沢敬太と吉岡優衣はプールを見ていた。

「あれっ？矢野のやつどつかいったぞ」

敬太はデッキブラシを2本持って立っている涼子を見て言った。

「帰ったんじゃないでしょうね」

ユイはあくびをしながら言った。

「トイレだろうな。それよりどうやって桜木をプール当番にしたんだよ」

偶然で3年連続もなるとは考えにくい。

「ああ、それは私がクジの割りばしを混ぜる役に名乗りをあげて、混ぜ終わった時に当たりクジを涼子に見せるようにしたのよ」

「桜木にしか使えない作戦だな」

「涼子はいいい奴だからね。悪い事したけど」

2人は3分ほど喋らず、黙って成り行きを見ていた。その間に涼子が持っていたデッキブラシのうち1本を菜々子を持ち、キャーキャーはしゃぎながらプールの床をこすっている後輩たちの中に入っていた。

「だいたいなんで今さらあの2人をくつつけようとするわけ？」

「え？」

ぽかぽか陽気に誘われてうとうととしていた敬太は、ユイの声でビクツとした。「アンタ恋のキューピッド的な事したいの？」

ずっと気になっていた事をユイは口にした。

「・・・あの二人が気まづくなっただのは俺のせいなんだよ」

「え？」

「まあ色々あったって事だよ」

「教えてよ」

「いや、話すと長くなるし」

「教える」

「はい」

ユイは睨みをきかせて敬太を見た。敬太は観念して話す事にした。そのとき、プールサイドに矢野勇介が戻ってきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4706f/>

---

プール当番

2010年10月11日01時42分発行